

■ ここしばらくは普段以上にリスク管理を厳重に…

ブレグジットを巡る英国と欧州連合（EU）のやり取りが、まさに“チキンレース”の様相を呈してきている。既知のとおり、メイ英首相はEU離脱期日を6月30日まで3カ月延期するようEU側に要請したが、EU首脳は5月23日を超える離脱延期を認めず、さらに英議会による離脱協定案承認を条件に出したと伝わった。

このままでは、本当に「合意なき離脱」が現実のものとなりかねない…ということで、昨日はポンドドルが一時1.3000ドル近辺まで下落。後に、一部報道で「英議会が来週中に離脱協定案を承認するという条件をクリアすれば、EUは離脱期日を5月22日まで延期することで合意する意向」、「メイ首相の離脱協定案が議会で否決された場合には、EUが9カ月の離脱延期を検討する」などと伝わり、足下ではポンドドルが一旦1.3140ドルあたりまで買い戻されている。

とはいえ、なおもブレグジットを巡っては波乱含みの状況であり、市場は警戒を解くことができない状態のまま。なにしろ、2016年の「ブレグジットの方針決定」自体が想定外であったことを考えると、何が起こってもおかしくないと思ってしまうのは致し方ないことである。

前回更新分で述べた通り、いずれにしてもポンド/ドルの週足は足下で一目均衡表の週足「雲」



としても、なお英国の行く先には数々の難題が待ち構えていると考えざるを得ず、遅かれ早かれ1.3000ドルの節目や31週線を試す展開になると個人的には想定する。

一方、今週19-20日に行われたFOMCの声明文の内容と参加メンバーらによる金利見通しについては、想定していた以上にハト派色の強いものであったと市場では受け止められている模様である。個人的には、そもそも事前の市場予想自体が甘かったのではないかと考えるが、いずれにしても市場が一旦ドル売りで反応したこと自体は動かしがたい事実である。

結局のところ、FOMC後のドル/円は上から200日線、21日線、89日線を順に下抜ける格好となり、FOMC以前よりは大幅弱気に傾いた印象。1月初旬から形成されていた上昇チャネルを下抜けるような動きともなっており、そこは要警戒と言える。当座は「一目均衡表の日足の「遅行線」の遅行線が日々線を明確に下抜ける格好となるかどうか」、また「週足『雲』上限を明確に下抜けるかどうか」などといった点に注目しておく必要がある。

もっとも、FRBのハト派姿勢が米金利の下押し材料となっていることで、米株価が依然として堅調に推移している点はドル売りの動きとの綱引き材料と見ておくことも必要であろう。VIX指数が低位で安定しているうちは、リスクパリティファンダが自動的に株式の組み入れを増やし続けると見られることから、そのぶん米株価の下値も限られると考えられる。

むろん、ここにきて米中貿易協議の行方に対する不透明感が少々増してきていることや、やはりブレグジットの行方が波乱含みになってきていることなどを考慮すれば、しばらくはポジション管理をいつも以上に厳重にしておかねばなるまい。

(03月22日 12:15)